

平成27年度「京都市生涯学習市民フォーラム」シンポジウム

京都 こころの創生

～ひとが紡ぎ、織りなす日本のこころ～

みなさんこんにちは。生涯学習マスコットのマナビィです。ブンブン飛び回って、皆さんの学びを応援しています。ヨロシク！

さて、昨年12月22日に、京都で活動する230の生涯学習関係団体のネットワーク組織「京都市生涯学習市民フォーラム」の総会とシンポジウムが開催されました。

シンポジウムでは今なお京都に息づく生き方の哲学や暮らしの美学を通して京都のまちの魅力についてみんなで考えました。今日はその様子をレポートします。



平成27年12月22日（火）午後2時30分～4時 京都産業会館8階「シルクホール」

- | | | |
|-----------|---------|------------------------------|
| ◆コーディネーター | 濱崎加奈子 氏 | 有斐斎弘道館館長，伝統文化プロデュース連代表 |
| ◆パネリスト | 井上 章一 氏 | 国際日本文化研究センター教授・副所長，京都市社会教育委員 |
| | 森 清顕 氏 | 清水寺執事補，京都市社会教育委員 |
| | 門川 大作 | 京都市長 |

◆「こころの創生」とは？

（濱崎氏）

本日のテーマ「京都 こころの創生」ですが、これに関わる「[まち・ひと・しごと・こころ京都創生](#)」総合戦略について、とりわけ「こころ」を掲げ、京都から発信しようという意図を、まず市長にお伺いしたいと思います。

（門川市長）

災害に備えて国土を強^{きょうじんか}靱化することや、産業政策、インフラ整備も大切ですが、日本の文化や「こころ」を強靱化しなければならないという危機感を持っています。

現在、日本では急速に人口減少が進んでおり、このままでは国内の市町村の半分は消滅するという危機感がようやく共有されつつあります。京都はすでに人口の急減を経験しています。明治維新の際、京都の人口は33万人から20万人余に激減し、京都のまちは「キツネやタヌキの棲^{すま}み家になる」と言われました。その時、私たちの先人は「子どもさえ地域の宝として育てれば、未来は明るい」と、文部省もなかった明治2年に64校の番組小学校をつくりました。身分差別がまだ色濃く残る時代に皆でお金を出し合い、すべての子どもたちが等しく学ぶことのできる場をつくったんですね。加えて、明治13年には御所の中に画学校もつくりました。人を育てることや文化を優先し、琵琶湖疏水や路面電車などの産業政策はその後でした。



京都市ではこの総合戦略の方針を決めるにあたり、そうした原点に帰ろうではないかという思いがありました。2001年に策定された**京都市基本構想**でも、京都市民の皆さんが大切にしてきた生き方や暮らしの美学といったものを大切に、具体的な政策に取り入れて、京都を活性化しようという考えが取り入れられています。

また、人口急減や東京一極集中などの大きな課題は人の生き方や心のあり方に大きく関わっていますので、行政が旗を振っただけでは解決できません。皆で議論し、「他人ごと」ではなく「自分ごと」「みんなごと」として考える必要があります。そこで「京都創生・お宝バンク」をつくり、そこに寄せられた市民の方々からのアイデアをもとに創生戦略をつくりました。

このように、創生戦略の原点には、市民一人一人の生き方、すなわち「ここ」を大切にしながら、「みんなごと」としてまちづくりを議論しようということがあります。

（井上氏）

明治維新の後、確かにこのまちは困難を乗り越えました。当時の新聞や府会の議事録などを拝見したことがあります。「このまま放っておけば、京都は奈良になってしまう」といった記述をよく見かけました。奈良からのお越しの方、ごめんなさい。しかし、この言葉を支えにしてこのまちは頑張ったんです。そして現在は、リニアモーターカーの路線を奈良と取り合っているんですね。歴史は繰り返すのだなと少し味わい深く思います。半分冗談なのでご容赦ください。（笑）

（濱崎氏）

危機を乗り越えるにも歴史から学ぶ。京都の基本には人があり、その基本に立ち返って考えていこうということなんですね。

◆ 京都人のプライドは高い??

（濱崎氏）

国内外の他都市と比較して、京都の人の「ここ」についてはどのようなものだと考えられますか。

（井上氏）

京都のまちなかの人はプライドが高いですね。例えば、東京に出張してきたことを「東京^{あさまくだ}下りしてきた」と表現する人が結構おられます。新幹線の「^{のほ}上り」に乗って東京へ行ったのに、「下ってきた」と言われるのです。おそらく他のまちではあまりないことでしょう。

海外では、フィレンツェ中心部の人もプライドが高いと言われます。フィレンツェは「ローマに負けていない」との気概を持っていますね。

（濱崎氏）

京都はよくフランスにおけるパリに似ていると言われますが、どうですか。

京都市基本構想

2001～2025年の京都のグランドビジョンを描いたもの。

その中で、京都市民が大切にしてきた生き方・姿勢が、「得意わざ」として、次の6つのコンセプトにまとめられています。

- 「めきき」 本物を見抜く批評眼
- 「こころみ」 冒険的な進取の精神
- 「たくみ」 ものづくりの精緻な技巧
- 「もてなし」 来訪者を温かく迎える心
- 「きわめ」 創造的な学習・研究
への意欲
- 「しまつ」 節度のある生活態度



(井上氏)

パリは紛れもない首都ですが、京都は首都ではありません。首都でないにもかかわらず誇り高いという点で、**フィレンツェ**に似ています。先日、ベルギーの方にブリュージュもそうだと伺いました。そうした都市を比べれば面白いかもしれませんね。

(森氏)

確かに京都の人にはプライドの高さを感じさせるところがありますね。しかし、そういうところが生き方を考えていく原動力にもつながっているのではないのでしょうか。フィレンツェといえば、京都と姉妹都市になって今年で50周年でしたが、昔から仲良しなのですね。

◆ 京都人のこころの器。京都のまちとは..

(濱崎氏)

「こころ」が大事とはいえ、その器となっている「まち」もとても大事だと思います。京都というまちはどのようなものなのか、改めて皆さんととらえ直してみたいと思います。

様々な視点があると思いますが、森さんはいかがですか。

(森氏)

私は学生時代、しばらく東京におりました。京都のまちは東京に比べるとコンパクトだと思います。東京23区の1区分ほどにいろいろなものすべてがまとまっている印象です。私はこの大きさがとても好きです。

また、京都は風景が長く変わらずに残っているまちでもあります。変化している所もありますが、例えば幼少期に連れられて行ったお店など、思い出のまち並みが今も変わらず続いている。そういったことも他のまちに比べて多いのではないのでしょうか。

(井上氏)

私も京都のまちはコンパクトだと思うのですが、京都の人が“コンパクト”と言った時には、花背や私の生まれ育ったあたり（右京区嵯峨）は含まれていないのでしょうか。（笑）

(森氏)

京都の人の感覚には、“自分が住んでいる所が京都”ととらえているところがあるかもしれませんね。

一方で、清水寺では、花背や舞鶴、美山などに山を所有し、お寺の維持・修復に使う建材を確保するための植林をしています。育った木を使うのはずっと先の話ですが、市内に限らずいろいろな地域に支えていただいています。

■ フィレンツェ市（イタリア）

トスカーナ州の州都で、人口は約37万人。中世には、メディチ家の擁護のもと、ダ・ビンチやミケランジェロが活躍したルネサンス発祥の地であり、市内には寺院や宮殿など歴史的遺産が豊富にあります。ウフィッツィ美術館には、「ヴィーナスの誕生」など多くの名画が展示されています。

フィレンツェとは、イタリア語で「花の都」という意味があります。古くから毛織物工業が盛んであるほか、工芸品、ファッション産業も盛んです。

1965年に京都市と姉妹都市提携をし、京都市役所前の広場には、フィレンツェ市から寄贈された「プッチーノ像（イルカを持った天使）」の複製が設置されています。



(門川市長)

京都市は、市域の74%が森です。国土に対する**森林の割合**は67%ですから、京都市は森林の割合も高いまちなのです。まちなかだけでは京都は維持できません。豊かな自然で都心部を支える地域の存在がありますので、全国にある地方都市や限界集落の気持ちも共有できる。

精神文化や宗教文化、ものづくり文化など、あらゆる文化をもう一度再認識しながら、都心部とそれを支える地域とが一体となって「地方創生」について考えたとき、京都は地域や限界集落の問題に対しても、日本全体の創生モデルを提示することができるんじゃないかと思っています。

(森氏)

お寺や神社で「**佃煮**」ができるほど多いのも京都ですね。和尚さんや神職さんも大変多くおられます。また、三条には古いカトリックの教会もあります。各宗教の総本山が結集しているので、日常の景色の中にお寺や神社があります。また、**地藏盆**やお正月の「**白朮火**」といった宗教性のある年中行事が日常生活の中に溶け込んでいるのも、大きな特徴ではないでしょうか。

(門川市長)

京都市内には私立幼稚園が100園近くあります。そのうち仏教系が一番多く、40園余り。次いで多いのがキリスト教系の幼稚園なんです。明治維新や戦後も、キリスト教系の大学や学校、幼稚園が京都に設置されています。

あらゆる宗教にまつわる施設が京都にある。そしてみんな仲良くしている。お寺で神父さんを見かけることもありますし、教会に数珠を持った人が来たりする。他国では考えられない面白いことだと思いませんか。世界中にある貧富の差や環境破壊、宗教対立に基づく困難な問題を解決できる哲学・精神文化のようなものが京都にはあるのではないかと思います。

(濱崎氏)

多様な人々や文化を受け入れてきた歴史から、京都には多くの知恵が蓄積されているのでしょね。一つ一つひもといっていけば、全世界の未来に向けた提言ができるかもしれませんね。

◆ **すぐそばで移ろいでいく文化**

(濱崎氏)

現在は人口減少などにより大きな変化が起きていて、ある種の「危機」だと思うのですが、人々がそれを身近に感じているのか不安に思うことがあります。

皆さんが身近に感じる具体的な変化には、どういったものがありますか。

(森氏)

千二百年のお寺の歴史の中で私がたずさわる時間などはほんの一瞬に過ぎませんが、この一瞬がなければ未来につながることはありません。

森林率 (H22)



・日本

国土面積: 約 3779 万 ha

森林面積: 約 2510 万 ha

森林率: 約 67%

・京都市

市総面積: 約 82,790ha

森林面積: 約 60,970ha

森林率: 約 74%

※ 政令指定都市では、2番目に高い割合です。

(1位は静岡市 76%)

子どもたちの夏休みのお楽しみのひとつである「**地藏盆**」。江戸時代にはすでに町内の主要行事の一つとして行われていた記録が残っているんだって。

京都市では、「**京都をつなぐ無形文化遺産**」として、2014年11月に「**京の地藏盆**」を選定。その際、市内の自治会・町内会を対象に実施したアンケートの結果では、約8割の地域で「**地藏盆**」が実施されていることがわかりました。幅広い世代の交流の場として、地域の絆を深める機会にもなっているんだね。



今度、清水寺では舞台の屋根の葺き替えを行うのですが、その建材であるひわた 桧皮がなかなか集まらないのです。他にも土壁の土など、お寺を次代に継承していくために必要なものが集まりにくくなっていますね。

職人さん自体が少なくなっています。**桧皮**は生きてひのきいる桧から皮を剥はがして頂くのですが、木を傷めないように剥ぐには職人さんの技術が必要です。一番身近なものと言えば、この法衣にもいろいろな技術が必要です。独特の技術が使われていますが、だんだんと製作技術が失われていくのだろうと歯がゆい思いをしています。

伝統や文化は一瞬でなくなってしまいますし、使う人がいなければ技術もつなげていくことは難しい。例えば、日本の民族衣装である着物を国民が一人で着られなくなったのは大きなことです。学校で着方を教えてくれるとありがたいと思います。

(井上氏)

お寺が桧皮やきちんとした左官仕事を保ってくれるのは尊いことです。今、お寺や神社からの仕事がなければ、ひわた 桧皮葺の職人さんは技術を伝えていく場がありません。左官職人さんも、近年はパネルをホッチキスで留めるような工事ばかりになっています。たけこまい 竹木舞(細く裂いた竹を格子状に組んだ土壁の下地材) から塗り壁を作るような伝統的な技術は、お寺や神社の修繕がなければ伝わっていかないでしょう。

ところで、着物に関してお尋ねしたいのですが、昭和 30 年頃のプールの写真を拝見しますと、女の子はスクール水着ですが、男の子はふんどし 褌はでした。私の祖父の世代などは、洋服を着ながらも下着は褌でした。森さんも市長も和服をお召しですが、下着はどうされていますか。(笑)

(森氏)

私は「ぎょう 行」の時は褌が多いです。普段から褌の僧侶もいて、いろいろですね。私は洋風かぶれしているかもしれません。

(門川市長)

還暦祝いに赤い褌をいただきましたが、そのままですね。

小学生の時、夏休みの水泳の練習で、1年生の時は褌でしたが、2年生からは違いましたね。ただ、今でも六尺の褌を巻くことはできます。ちょうど昭和 30 年代前半の移行期間、変化の時だったのですね。

(濱崎氏)

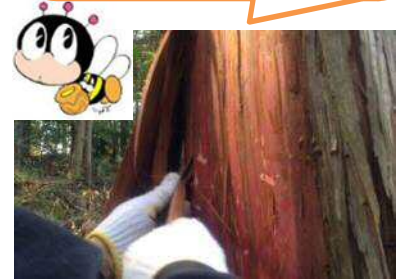
京都のお話で今話題の井上氏先生でいらっしゃいますが、何か京都人としての身近に感じる変化はございますか。

(井上氏)

関西弁に関しては変化を感じています。例えば、「来なかった」を関西弁では「きいひんかった」「けえへんかった」と言いますね。この頃、40 代以下

桧皮は樹齢 80 年以上の桧の立木から表皮を剥いだもので、1200 年以上の歴史があるそうだよ。

京都市でも京北地域で採取が行われているんだけど、職人さんの数が減少しているだけじゃなくて、樹齢が若くて採取できない桧が多くなっているんだって。



**これ答えな
あきませんやろか。(汗)**



の人はほとんどが「こうへんかった」と言っています。共通語の力行変格活用未然形、「こない」に流されているわけです。日本語の場合は国語が乱れていると正す人がどこかにいますので世間の話題になりますが、関西弁は誰も正す人がいませんし、誰も意識しません。(笑)

他にも、私の子どもの頃は「ぼんさんが屁をこいた」と言ったものですが、近頃の子どもたちは「だるまさんが転んだ」と関東風の言い回しになっていますね。この「ぼんさん」はお寺のお坊さんのことではありません。昔は、お店にいた^{てっぺん}権さんのことを「ぼんさん」と言っていた。その「ぼんさん」を指しているのだと思います。けれど「ぼんさん」も今は言わなくなりました。お寺のお坊さんを指す言葉だと、たいていの人は思っています。言い出すときりがないですが、「ぶぶ漬けでもどうです」とは、昔は確かに聞いた気がしますが、今はまず言いませんね。今、あえて言えば他府県の人は喜ぶと思うのですが。

(門川市長)

「ぼんさんが屁をこいた」「なまぐさ坊主」など、落語のネタにお坊さんがよく出てきますね。(笑) 明治維新の頃、日本人の9割は字の読み書きができました。ヨーロッパなどでは識字率が半分にも満たなかった時期です。これはお坊さんや神職の方が庶民の中に入って字を教えてくれていたからです。宗教者が庶民の中にいた、だからこそ^ゆ擲^ちもされたのだと思います。

今、京都市内にはコンビニが600軒程度ありますが、お寺や神社は2000を超えています。当時のようにお寺・神社が連携すれば、世界一住みやすいまちになるのではないのでしょうか。

(井上氏)

お寺の数だけ競えば、滋賀県の方が多いらしいですよ。(笑)

日本の小学校には掃除当番がありますが、諸外国ではまず見かけません。多分、お寺の修行時に雑巾がけをすることが学校に残ったのでしょう。男の子が小さいときに丸刈りにされたり、男の子のことを「うちの坊主」と言ったりするのも、多分お寺の文化が残ったのだらうと思いますね。

◆ 心は形を求め、形は心を進める

(門川市長)

危機感を持っているのは**京町家の喪失**です。京町家は日本人が大切にしてきた暮らしの文化を象徴するものです。濱崎さんも一生懸命、保存活動をやってくださっていますが、相続税の関係で売ってしまわれることが多い。

「心は形を求め、形は心を進める」という言葉が仏教にあります。町家がつぶされていくと、あらゆる文化が危機にさらされます。以前、生け花の先生が、「家に『床の間』がなくなったので、下駄箱の上に花が生けられるようになった」と淋しがっておられました。最近はお下駄箱もなくなったので、花を生けること自体がなくなった。住まいの形も文化を左右するというこの一例ですね。



平成 20・21 年度に実施した「京町家まちづくり調査」では、市域に4万8千軒の京町家が残存していることを確認した一方で、過去調査と比較して、年間約2%で減少していることも分かっているようだ。



着物も、西陣織の生産量は最盛期の8%になってしまいました。京友禅は2.8%。職人も、西陣では以前2万人だったのが、今は2千人を切っています。これを何とかしていかなければならない。

私は365日着物を着ていますが、西陣織や京友禅ばかりではありません。新潟のおちやちぢみ小千谷縮や博多の帯、仙台はかま雛の袴なども着ています。和装も京都の文化の一つですが、この文化を支えているのは全国つうぽう津々浦々の地場産業です。他にも、京料理に必要なコンブやかつおぶし、ニシンそばのニシンや蕎麦など、津々浦々の地場産業が京都の文化を支えて全国に発信されるしくみが千年もの間つながってきました。それが東京中心となったここ数十年のうちに、経済性や効率性、あるいは「今さえよければ良い」というような考え方の中で崩れてきています。

京都では、自然との共生や家族・地域との絆、その背景にある宗教的な情操などがうまく融合していた暮らしの中で、技術や文化が育まれてきました。これが全て崩れようとしている。ここが崩れてしまうとなかなか元に戻りません。伝統産業や伝統技術は京都の強みであり、そこから精密機器や医療機器などの先端産業が発達したように、うまくつながっています。これは京都だけやなく日本全体のことであり、この原点を大事にしなければならないと思っています。

（濱崎氏）

すべてが有機的につながって育まれてきたからこそその強みが一つ抜け一つ抜けしていく中で、一つ抜けることがすべての崩壊につながるという危機感も共有しなければならないと思います。

本日会場にお越しの方もほとんどの方が洋服ですし、家に床の間のない方も多いと思います。技術が失われていくことも、京都だけが頑張ればよいというものでもありません。過去に戻るわけではありませんので、これからどうしていけばよいのか。京都市ではそこに「日本のこころ」をうた謳っています。具体的にどうしていけばよいとお考えになられますか。

（森氏）

歴史的にも、京都は単独で何かができているというわけではありません。例えばニシンそばもきこまへふね北前船のおかげであったろうし、お米などいろいろなものが全国から来ていた。京都には総合プロデューサーがいて、それらをまとめて京都の文化をつくり上げてきたのでしょ。日本全体の力で京都の文化ができている、そのことが忘れられがち気がします。

日常的になりすぎてその背景が見えていないということがあります。例えば毎朝のご飯も、食べるまでにどれだけの人が関わり、自然の恵みがあるのか、それを実感していないことが多分にあります。生活の中でその物がある背景を考え、感じることをしなければならないと思います。

また、京都の文化を守っていくうえでは、今の生活スタイルも考慮しなければいけません。お寺では掛け軸に御朱印を押すのですが、今の家には床の間がなく、掛け軸をかける場所がないのです。生活様式が変わるとすべてが変わるということを切実に見せつけられている気がします。

すべてをそのまま伝えることも大切ですが、変えるべきは変えなければな



らないし、変えざるをえないところも出てきます。次世代に何を伝え残すのか、取捨選択が迫られる。そこで何を残して何を变えていくのか、考える・感じるということが京都人として生きていく中で大事だと思っています。

（濱崎氏）

以前、市長との対談の中で森さんが「京都市民は何を伝え残すべきかわかっている」と仰っておられたのが印象的だったのですが、どういった点でそのように思われるようになったのですか。



（森氏）

京都って結構斬新じゃないですか。明治維新の大変な時に、琵琶湖から水を引いてまちなかに水力発電所を作ろう、その電力で路面電車を走らせようとか、すごく奇抜だと思います。あまり知られていませんが、役所の方が京都の産業発展のために、境内の音羽の滝の水がよいと言って清水寺の中にビール工場を作られたこともあるのですよ。時代の先を行き過ぎてつぶれてしまいましたけど。（笑）

文化や風習は、親から子へと家庭生活の中で引き継がれていきます。その時々^の生活に合わせて簡素化はしても、正しい形やその背景にある思いは子どもたちに伝えていく。そういうことを見極めている気がします。

（濱崎氏）

核家族化も大きな影響を与えていて、コミュニティが変化していく中で、家族の中で伝えられたことが伝わりにくくなっているのかもしれないね。

（森氏）

コミュニティの変化というのは大きいと思います。

この頃の実感として、物事と心にすごく距離感を感じます。法衣を着ているためか、「なぜ人を殺してはいけないのか」と修学旅行生から聞かれることがあります。この時、子どもたちが言う“人”は実在していない。つまり、子どもたちは「人を殺す」ということについて何となくわかっているのですが、その“人”は、自分自身やあるいは親や友達といった具体的な人格でもないの、実態として感じていないんです。考える観念の世界と実際の世界とが乖離^{かいり}している。この距離感が、現代の日本全体の「こころの隙間^{すきま}」のように感じます。

フィレンツェ市庁舎は、もともとフィレンツェ共和国の政庁舎として建設され、メディチ家もここを住居としていたことがあるそうだよ。

現在は美術館としても開放されていて、内壁にレオナルド・ダ・ヴィンチの絵が隠されていると、発表されたこともあるんだ。



◆ 形を守ること

（井上氏）

フィレンツェ市民の建物を守ろうという意識には驚嘆します。フィレンツェの市役所は日本でいえば鎌倉時代の建物なのですが、それが今でも庁舎として使われ、その中で執務が行われているのです。歴史と伝統を誇る京都でもこれは考えられないじゃないですか。まちの形を保とうという彼らの気持ちはすごいと思います。

第二次世界大戦時、東京が初めて空襲されたのは1942年のことです。その1年後にローマも空爆を受けたのですが、イタリアはパニックになり、1週間後に連合国へ和平をもちかけています。多分、ローマやフィレンツェの遺跡が空爆で破壊されることに耐えられなかったのだと思います。そのことを思うと、空襲があってから3年間も戦争を続けた我が民族は何なのだと思います。よく「イタリアはだらしく、日本とドイツは最後まで頑張った」と評価する人がいますよね。私は、この点に関してはイタリアが一番尊敬されるべきだと考えています。

幸い京都はあまり空襲を受けなかったのですが、私が今住んでいる宇治も含めて多少の空襲はあったのです。ある研究会でその話をした時、「宇治は京都ではありません」と言われました。こんな話題でもそこにこだわるのかとあきれたことがありました。(笑)

証明はできないのですが、フランスもナチスドイツの侵攻に対してすぐに降伏しています。やはりパリを戦闘で壊してはならないと考えたのだと思うのです。古くからの形を守るというのは、戦争への抑止力にもなるのです。

(濱崎氏)

私も古くから伝わる建物(有斐斎弘道館)を守っていますが、冬は寒いし、維持していくのは経済的にも大変です。もともと住んでいた家でもないので、「なぜそんなものを残すのか」と聞かれることもあります。建物のお世話をしていると、「よくできているな」と実感します。暮らしやすさなど合理的なメリットは挙げにくいのですが、何となく安らぎ、落ち着き、人が集まってくる…とか、言葉にしにくい気持ちの面で伝えられてくるメッセージがあるのを実感します。

形あるもの、空間というものを継承していくことは大変です。そんな価値がどこにあるのかと問われたら、積極的な回答は見出しにくいですが、そのままの姿で伝えられてきたということこそ大きな価値があると思うようになりました。

着物も全く変わっていないわけではありませんが、基本的な形は変わらずに着続けられてきました。千年とは言わずとも、数百年でも数十年でも伝えられてきたことには何か意味があるのじゃないか。だから、急激にそれを変えてしまってもいいのか、なくしてしまってもいいのかということを考えます。一度なくしてしまうと、もう二度と取り戻すことはできなくなってしまう。井上先生が言われる「形を大切にすること」の重要性を実感しています。私も、日本人はもともと形を大切にするという民族ではないと思います。作っていく、作り変えていくということが技術の継承と言われますが、それができなくなっていることを自覚するうえでは、よくわからなくても、今あるものを次代に残すということがとても大切な時代になっているのではないかと、お話を伺いながら思いました。

(門川市長)

京都市も、「今なら間に合う」という思いでいくつか試みを行っています。その一つが、**京都を彩る町家などの建築物や庭園を守ろうという取組**です。

濱崎さんが保存活動に取り組んでいる「有斐斎弘道館」(上京区上長者町通新町東入ル)は江戸中期の京都を代表する儒者・皆川淇園(みながわ きえん)が創設した学問所で、私立大学の先駆とされているんだ。

淇園は「開物学」という独自で難解な学問を創始する一方、詩文や書画にも優れた風流人だったんだって。



“京都を彩る建物や庭園”制度

京都の財産として残したい建物や庭園を公募によりリスト化し、様々な活用を進めることなどにより、維持継承を図っています。

「認定」された建物・庭園の文化財等の指定・登録を目指すための保全・再生を目的とした改修工事費用を一部助成する「ランクアップ助成」を、2014年11月に創設し、助成第1号の「黎明会館」が2015年7月に国の「登録有形文化財(建造物)」に答申されました。

京都には国宝や重要文化財が多くありますが、その他にも残していきたいものはいくらでもあります。それらを自薦・他薦していただいて認定していくというものです。無形文化遺産についても「京都をつなぐ無形文化遺産」制度を創設し、料理屋さんではなく京都の家庭で食べられている和食や地蔵盆、和装の文化などを家族・地域で大切に作るしくみを作ろうとしています。

また、2年前から小・中学校で子どもたちが**着物の着方や生け花、茶道などをたしなみ、英語で説明できるようにしようという取組**を始めました。今始めれば、2020年の東京オリンピックの時にその子どもたちは大学生・社会人となっています。そして、今なら地域の方に先生をやっていただける。地域ぐるみの教育ができるんです。明治維新の際に地域で学校をつくったような「こころ」をもう一度大切にし、伝統・文化を大切に守り伝える。そんなことを市民ぐるみでできるのではないかと考えています。

今、「京都の町家に住みたい」「京都の文化を大切にしたい」と思っている方は全国や海外にもいて、8年前、京都は転入者よりも転出者の方が3,000~4,000人ほど多かったんですが、この一年で見れば3,200人ほど転入超過の状態です。

また、この頃は若い方の朱印帳めぐりや日本酒^{さけ}好み、和装姿が増えてきており、新しい潮流ができてつつあります。着ている着物は西陣ではなく外国産が多いので、すぐに西陣の振興とかにはつながりませんが、これを大切にしながら「ほんまもん」につないでいく。これが今の京都ならできると思っています。

(濱崎氏)

「もうあかんやろ」とか「自分だけならいいやろ」とか思ってしまいますが、私たち一人一人が「今ならまだ何とかできるんじゃないか」と希望を持つことですね。今が勝負どころということで、「ほんまもん」につなげていけるように力を合わせていきたいですね。こういう時代だからこそ、京都の果たす役割は非常に大きいと思います。

結びに ～ 紡いでいく日本のこころ ～

(濱崎氏)

これまで「日本のこころの創生」をどのようにしていけばよいかということで様々なお話を伺ってまいりましたが、最後にまとめの言葉をお一人ずつお伺いしたいと思います。

(井上氏)

実を言うと、私は京都の料亭の床の間の前でいただく懐石料理は苦手なんです。特に、お膳を運んでくれる方が器や軸物^{じくもの}の説明をされると堪忍^{かんにん}してほしいなあと(泣)。そういううんちくがなければ、美しい佇^{たたず}まいだと思える程度の心のゆとりはあるのですがね…。こういう私の「こころ」は改めなければならぬのでしょうか。(笑)

もう一つ、平安神宮のお茶会で、着飾ったご婦人たちがはた目では醜いほ

“京都をつなぐ無形文化遺産”制度

世代を越え、暮らしの中で伝えられてきた無形文化遺産の価値を再発見、再認識し、内外に魅力を発信するとともに、大切に引き継いでいこうという市民的気運を盛り上げるための京都市独自のしくみとして創設。

これまでに「京の食文化」「京・花街の文化」「京の地蔵盆」が選定されています。

子どもたちによる観光客にやさしい国際文化観光都市・京都の魅力発信事業

子どもたちが京都を“知る”取組として、「歴史都市・京都」に対する興味関心・理解を高め、実際に体験し、それらを尊重する態度の育成に向けた様々な伝統文化教育を充実するとともに、京都を“伝える”取組として英語教育強化拠点校の設置や実用英語検定「英検」の受験促進などを実施しています。



どの正客^{しょうきやく}のゆずり合いをしているんですね。そして、しびしび正客に座った方のささやかな不手際を後ろでヒソヒソとあげつらっている。この伝統も守らなければいけないのでしょうか。(笑) いかにも京都らしい伝統だと思うんですが。

ブラジルである大学の学長に紹介していただいた時のことです。紹介者は私のことを「研究者だが著述家としても非常に有名だ」と言ってくれたので、私は「とんでもない」と答えたのです。ところが、紹介してくれた人は後で「なぜちゃんと私は有名だと答えてくれないのか。ウソでも有名だといってほしい。私のメンツはどうなる。」と怒り出したのです。



私たち日本人は「謙虚」といえばいいんですが、自分を低くあらわすことを真心だと思っている節があります。しかし、これは国際的には非常にひきょうなふるまいに見えるのですね。例えば、学校のテストで、事前に勉強していたにも関わらず「全然していない」と言って油断させ、平均点を下げようとどっかで思っていることがあるじゃないですか。(笑) どうやらこのくらしぶり・こころの源はこのまちにありそうな気がしています。これも日本文化だといえばいいのですが、京都が国際的に門戸を開こうとしているこの時に、この文化はどうなのかなとも思っています。

(森氏)

このごろは、「美意識」となると高いお金を払わなければならないような風潮があるようです。そうではなく、窓辺や道端に自生する花を挿す^さだけでも美しいと感じる心の余裕があったはずです。生活の中にちょっとした遊び心や美しさを取り入れることが、私たちの日常生活の中の文化だと思います。文化というと、何か目に見えず、言葉では聞くけれども実態はつかみにくいといったところがありますが、日常の中に文化があるはずです。こうしたものを見直していくことも、今すぐできることではないでしょうか。

清水寺の法要では、法要の最初と最後に「惣礼^{そうらい}」という三度頭を下げる礼式があります。物心そろって「すべて(総て・惣て)」という意味になり、あらゆる「物」と「心」に感謝するという礼式です。

僧は法要などでも、まず「形」から学びます。ある時、先輩の和尚に「形ばかりを学んでいるが、形だけでよいのですか」とたずねたところ、「まず形を整えなければ水は入らない。同じ形を作るのであれば大きな形を作れ。そして、自ら作った形に万遍^{まんぺん}の水を受け止めよ。それから更に形を大きくして、漉^たえた水を次に渡していけばよい」と教えられました。

どのような意味があるか分からずとも、まず形を整える。そうすると形に中身が入ってくるということですね。日常生活の中でもう一度、物や形というものを見直し、そして、その中にあるものを次の人々に伝えていく。物や形の中に京都の「こころ」、ひいては日本文化があるのではないのでしょうか。ですから、自分たちの一番身近な生活の中にあるものをもう一度見直すことが大切なことだと思います。



(門川市長)

生活の中に文化がある、その背景に祈りがある、そこに千年の歴史のいろいろな知恵がある。普通にしている中に大切なことがあり、その価値を皆が再認識しなければなりません。

今、海外からも多くの方が京都に来られます。左京区の久多で農家民宿をされている方がおられるのですが、宿泊された海外の方はお餅をついたり、糺を編んだり、軒先に干し柿がつるされていたりする普通の生活に大変感動されるそうです。こういう文化がどんどんつぶれていっています。すべては守れませんが、千年伝わるものを大切にしながら、同時に創造的に改革を進めていきたいと考えています。形が大切です。形を大切にしたときに型破りな人が出てくる。これも京都ならではだと思えます。

(濱崎氏)

本日は京都ならではの、心とした日常の言葉から、着ている物、技術、世界の問題にまつわる深遠な哲学や平和に至るまで、様々なことが話題になりましたが、どんな切り口からもそこにつながれるのは、やはり京都だと思いました。

皆さんも御自身の中を少し掘ってだけで、必ず次世代の人々や世界中の人々のためになる要素がたくさんあると思います。また、井上先生のようにちょっと引いて客観的に眺めてみればまた違った発見があり、いろいろな知恵に広がっていくかもしれせん。

京都のまちを含め、伝統的なものには良い面も悪い面もありますが、それらをひっくるめて「文化」ですから、良い方向に向かっていくにはどうしたらいいか、少し先の時代にはどうなっているのか、もっと先の時代にはどうなっているのかと考えるのは、今を生きる私たちの責任です。

「こころの創生」を京都から皆さんと発信していければいいなと思います。



(拍手)

皆さんいかがでしたか？

少し難しいテーマだったけど、楽しいシンポジウムでした。僕は鴨川の桜並木や山々を彩る紅葉を美しいと感じる気持ちなども忘れたくないなと思います。

皆さんは次の世代に残したい・伝えたい「日本のこころ」は見つかりましたか。

